

ケインズ - 落日の肖像

佐賀大学 米倉 茂

ケインズはブレトンウッズ会議において閉会の挨拶をするなど、戦後通貨体制を構築した人としてホワイトと共に英雄視されてきたが、その栄光は凋落と背中合わせであった。ケインズは IMF 協定を自画自賛したが、すぐにこれを杜撰な産物と批判するようになる。国際収支危機に陥った時でも IMF の承認がなければ為替取引を制限できなくする条項に同意し、英国は通貨政策の主権を奪われた。ケインズは第 8 条の意味することが理解できず、同条をめぐる論争で同僚のロバートソンに「ダニ」呼ばわりされ、完敗した。ケインズは蔵相に泣きつき、IMF 協定の変更を米国に懇願させたが、相手にされず、逆に足元を見られ、「ブラック・コメディ」（ケインズ全集の編集責任者のモグリッジ）を演じる。

ケインズは経常勘定の通貨交換が自由になるはずの第 8 条国においてさえ為替管理を維持しようとしたが、戦後経済は自由貿易の方向にあり、IMF は民間の為替取引の自由化をめざしていた。ケインズの考えは時代錯誤であり、ルイス・キャロルを愛読したロバートソンの言え、「不思議の国のケインズ」であろう。IMF 法制局長ゴールドはケインズの理解を「奇妙な逸話」として嘲笑し、ロバートソンに軍配をあげた（1981 年）。

過ちは続く。あれほど為替管理にこだわっていたケインズは 1945 年秋の対米金融交渉においては自由為替論者に豹変する。米国の金融援助を期待し、その中身も確認しないまま、ポンドの自由化を約束してしまった。自分の手の内を明かしポーカーに臨むギャンブラーであり、英米金融協定では肝心の贈与はなく、きつい条件の借款を得ただけなのにポンドの自由化を実行させられた。ケインズは統制経済、自由経済を同時に唱えたエニグマの人物だった。このジクザクぶりに、またホワイトの甘言に乗せられ続けたことにさすがの英国大蔵省も不信を強め、対米金融交渉の土壇場で解任まで考えたが、米国との体面上、回避された。ケインズの戦後通貨構想も無に帰した。ケインズが資本移動規制を盛り込んだ IMF 協定は資本移動には実際には無力であった。ドル不足の中、1947 年の夏に生じた大規模な資本移動（ポンド売り）を IMF は何ら規制できず、ポンドの自由化はあえなく頓挫した。ドル不足の見込みを否定していたケインズは幸いなことに、この事態を目撃していない（1946 年 4 月没）。戦後の通貨体制を律したのは IMF でなく、キー・カレンシー・アプローチ（ウィリアムズ教授提唱）であることも意外に知られていない。

ケインズの構想は裏切られ続けていたが、弟子は神官の役に徹し、ケインズ神話を捏造し続ける（特に『ケインズ伝』のハロッド、カーン）。そのためか、日本のケインズ研究はケインズのクライマックスにおける栄光・挫折の経緯を正確に評価できない。実際、日銀、大蔵省の人々までもが IMF 協定を誤訳、誤解説する現状は変わらない。とはいえ、ケインズ全集（翻訳では不可能）やバロー、ドーマル、プレスネル、モグリッジ、フォードなどの研究と対照させれば、ケインズの弟子の記述は通用しないはずであるが、これらの文献が日本では理解されていない。ケインズ神話の霧を吹き払う一陣の風が待たれる。